

# 子どもが抱く高齢者のイメージ

金田千賀子

## The impression of the elderly from children's standpoint

Chikako KANEDA

要旨：本研究では、子どもが高齢者をどのようにイメージしているのかを明らかにするために、学童保育に通う子どもたちに生活時間調査、自分たちの祖父母大人・お年寄りのイメージについてヒアリング調査を行った。その結果、自分たちの祖父母に対しては「○○してくれる人」「○○している人、得意な人」といった具体的な回答であったのに対し、高齢者のイメージは、低学年の子どもは、「死んでいく人」「よぼよぼ」「杖をついている」「白髪」といった見た目とマイナスイメージであった。高学年になると、「昔のことをよく知っている」といった高齢者の特徴を評価している。このことから、祖父母と高齢者とは必ずしもイコールではないことが明らかになった。このことから、イベント的に関わりをもつのではなく、定期的に関係性をつくりながら子どもと高齢者とが接点をもつプログラムの開発が必要であることが示唆された。

Keywords：子ども，高齢者，イメージ  
child, elderly, standpoint

### 1. はじめに

「ときどき おばあちゃんは おとうさんに むかってどなたでしたっけ なんてきいたりします」「ときどき おばあちゃんは おかあさんのことを<どろぼう>!といます」これは、谷川俊太郎の『おばあちゃん』一節である。この絵本は、少年が主人公となり、認知症になった祖母とそれを取り巻く家族の様子を描写している。この絵本の最後では「ぼくは もしかすると おばあちゃんは うちゅうじんに なったんじゃないかと おもいます」「うちゅうじんといっしょに くらすのは むずかしい。うちゅうじんは にんげんそっくりでも にんげんとは どこかちがうから。」と認知症の祖母と生活する困難さについて触れ、「おとうさんや おかあさんも としをとると うちゅうじんに なります。ぼくも いまに うちゅうじんになります。」と締めくくられている。

これを読み解くと、子どもは認知症の祖母を「宇宙人」と理解し、将来的には父母や自分が認知症になると言っている。つまり、年をとると「宇宙人」になるということなのである。老いは人間を宇宙人にしてしまうという理解である。果たして、子どもはおばあちゃんを「宇宙人」と理解したまま成長していってしまうのであろうか。ここに登場する「宇宙人」と認識されたおばあちゃんは、いつも寝ている、オムツをしている、食事を1人で食べることができない、ご飯を食べたことを忘れてしまう、物取られ妄想がある、息子のことを認識できない、薬が効かない人という特徴を持っている。ここでは、このような人は人間ではないと認識されてしまっているのである。

高齢化が進む日本において、寝たきり、認知症など病や障害などによって、介護や介助を必要とする高齢者は増えてきている。そのようななかで、この少年のような認識のまま大人になっていく

と、高齢者は「宇宙人」という認識になりかねない。そして、「宇宙人」は人間ではないのだから、「高齢者は人間ではない」という理解になるだろう。しばらく前までは、おそらく子どもでなくても認知症高齢者を宇宙人のような人と感じていたことかもしれない。認知症が人格を奪い、人間らしくなくなると言われていたからだ。しかし、ここ数年、認知症である本人が認知症を患いながら生活をしていること、そしてどういう感情があるのか、どう理解してほしいのかということを語る機会が増えてきたため、「認知症＝何もわからなくなる人」というこれまでの考えが払拭されてきた。それにともない介護のあり方も少しずつ変わってきた。認知症の介護の専門家資格の創設や、さまざまなプログラムがその一端を物語っている。しかし、これは専門職や認知症高齢者を介護する家族の一部で行われているに過ぎないのが現状である。職業として、また家族が介護する状況になってはじめて認識することも稀ではない。

では、この認識はどのようにつくられるのだろうか。どうして、認知症高齢者は人間でなくなってしまうのだろうか。さらにいえば、老いることがどうして人を宇宙人へと変えてしまうのだろうか。子どもが高齢者をどう理解し、認識し、そうした認識はどのようなきっかけで変化していくのであろうか。すなわち、宇宙人という理解のまま大人にさせないプログラムが機能するのであろうか。いや、子どもの時期からこうした老いへの認識を形成するプログラムが必要なのではないだろうか。そこで本研究では、子どもの生活に高齢者を理解する機会がどのくらいあるのかを明らかにしていくことにする。

## 2. 近年の子どもたちの生活環境と生育

わが国は高度成長期以降、人々の暮らし方を変化させてきた。「経済成長につれ産業構造が農業を中心とする第一次産業から工業、サービス業を中心とする第二次、第三次、産業へと大きく変化した。このような変化は、都市部への移住と父親たちのサラリーマン化を促した。父親たちのほとんどが朝早く家を出て、込み合う通勤電車に乗って職場に向かい、夜遅く自宅に戻る、その間、家にいる母親が、家事や育児をしながら、子どもとともに父親の帰りを待つ、というのが平均的な家庭のかたちになった。」「さらに暮らしが豊かになり、家事や育児の手間が省け、さまざまな家事サービスが利用できるようになった頃から、母親たちの自己実現活動と、パート就業や本格的な就業が多くなる。当然、共働き家庭も多くなる」(門脇1999)。姫路市が2004年3月に報告した「姫路市子育て支援に関する市民意向調査」によれば、小学校に通う児童の父母の就労状況は、父親の場合、正社員か正職員として働いているのが78.7%、自営業・自由業が16.4%である。一方で、母親の場合、正社員・正職員は13.4%、パート・アルバイトが34.1%であり、家事専従・無職が38.3%という結果であった。これにより小学生の母親の約60%が就労していることがわかる。また、同報告書では、日曜日の勤務の状況もたずねている。それによれば、小学生の子どもをもつ父親が、日曜日に全く仕事がない割合は、57.4%であり、母親では69.0%であった。このことから、現代の小学生の子どもをもつ両親の働き方として、父親だけでなく、母親も雇用形態を問わず約50%が就労していることが明らかとなった。

尾木(2005)は、今日、子どもたちの生活が急速に変容しているのは「子ども期」の喪失であると述べている。「子どもは日常生活の中でゆっくりと『子ども期』を楽しむことができなくなっている。」ここでいう「子ども期」は、「独立した人格の主体である子どもが未来の主権者になるために、最善の利益を受け、権利の行使をする発達保証期」と定義している。その理由は、親子関係と子育てのあり方の変化だという見解を示している。家族や地域が子どもの発達段階にあわせて保護していく度合いを変化させていくことが、自然にできていた地域社会が薄れていき、子どもも大人と同じように扱われ、子どもの発達を地域が支える仕組みが消滅してきている。加えて、家族人

員や兄弟姉妹の減少による生活単位の自体の現象が、社会力の低下を招いているとの指摘もある。門脇(2003)は、「今では、毎日一緒に暮らす家族は、せいぜい三人かあるいはそれ以下となった。三人の内訳を考えれば、一人は父親、一人は母親、あと一人が長男か長女のどちらかでどっちにしる一人っ子には変わりはない。ヒトの子の社会力を培うには、多様な他者との頻繁な相互行為が必要という理屈に照らしてみれば、世帯人数が五人から三人になるという変化はきわめて大きな意味をもっている」と述べている。ここでいう社会力とは、「社会的動物ないし社会的存在たるに相応しい人間の資質能力」と定義している。地域とのつながりも薄くなり、家族構成員も減少しており、さらに、個室化と個人テレビの所有など生活の個人化は、門脇のいう相互行為の減少を加速させている。食事場面一つとってみても、それは明らかであり、(株)第一生命経済研究所が2005年4月に報告した『親子関係に関するアンケート調査』において、子どもと一緒に朝食を食べている割合は、小学校低学年で42.2%、高学年でも46.0%という結果が報告されている。また、夕食においては、小学校低学年で57.8%、高学年でも58.4%であった。これは、役半数の小学生が孤食であることを意味している。このような中で、大勢の人と接触する機会をもつことは非常に困難であることは容易に考えられる。

すでに80年代に、子どもにカメラのフィルムを渡し一日の生活を自由に撮らせるという調査を行った野田は、都市に住む子どもほど、撮った写真に人が写っていないことを明らかにした。子どもが自らの世界から他人を排除している現れであり、特に都市に住む子どもに顕著にその傾向がある。そして、生活の中に感動がなくなっているという。また、特に予定がない時間を「自由時間」と表記する子どもがいることから、「そもそも自由であるはずの子どもたちの日常で、日曜日のひと時を、自由時間としてとりたてて意識しなくてはいけなくなっている。というよりも、決められた予定からこぼれ落ちたほんの数時間だけが、何者にもならなくていい時間なのかもしれない」(野田1988)。この時間は何をする時間なのかが決められていないと、時間と上手く使うことができなくなっているのではないだろうか。

一方で、子どものあそびに着目してみると、「近年、子どもたちのあそび方も変化してきた。日本の子どもたちのあそび時間は平均して約四時間～五時間の間である。これは多少、少なくなっているが、今も昔もさほど変わらない。その内容が変化している。」「子どもたち自身があそんでいると実感している時間はその半分くらいになってきている」(仙田1992)。つまり、子どもたちは1日2時間ほどを遊びの時間として認識していることになる。また、あそび方は野外から屋内になり、沢山の友達と一緒にあそぶより、屋内で2人ないし1人でテレビゲームやカードゲームであそぶ率が高くなってきた。大人が作り出したゲームによりあそび方を考えるということが不要になってきているのだ。このことは、「子供の世界をふくらませるように大人が援助していくのではなく、子供に先だって、大人が子供の遊びや生活を構成するようになった。こうして子供たちは大人に既定された子供の世界に生かされるようになっていく。」ということの意味する。

このような生活を送る中で、両親以外の大人や高齢者と接触する機会があるのだろうか。少なくとも、子どもたちのあそびのなかで、それは見出せない状況ではないだろうか。

### 3. 学校以外で子どもが過ごすプログラム

学校以外で子どもたちが場として考えられるのが、まず、共働き家庭の子どものための「学童保育」である。これは、利用するためには共働きという条件があるため、子どもすべてが利用できるものではない。他に考えられるのは、スポーツ少年団である。これは、各地域や学区単位規模で行われているものなど様々である。たとえば、剣道、バレーボール、サッカー、野球などがあるが、これらは、保護者と地域と指導者とが一体となってやっているところに特色がある。また今日では、

習いごと、学習塾等も学校以外で過ごす方法の一つといえるだろう。塾や英会話などといった学習系の習い事のほかに、ピアノ、バレエ、書道等といった芸術系のもの、スイミングスクールやテニススクールといったスポーツ系の習い事を組み合わせている場合も多く、毎日異なる習い事をして過ごしているという子どももいる。しかしながら、これらは放課後のプログラムとしてあるものではなく、従って、利用したいときに利用できる開かれたものではない。

2002年6月に兵庫県教育委員会が行った「児童生徒の土曜日・日曜日の過ごし方に関するアンケート調査」では、小学5年生に週休2日制になってからの土曜日の過ごし方を調査した。それによれば、小学生の活動として最も多かったのが、「自分の趣味や好きなことをした」、「家で勉強した」という回答が全体の約70%を占めていた。また、「地域の団体、グループ、サークルなどの活動に参加した」と回答したのが32%、「習いごと（習字、ソロバン、ピアノなど）に行った」が24%であった。このように、子どもは休日や放課後を過ごす活動は、特にプログラムとして確立されているものではない。しかも、塾や習いごと、スポーツ活動は、同世代の子どもたちが一緒に取り組むものが多く、多世代との接触の機会とはならない。また、地域の団体、グループ活動への参加もイベント的なものが多く、そこで会う人も非常に限られていることが予測できる。このように考えると、現代の子どもたちが置かれている環境は、学校と自宅、習い事の3点で構成されているといっても過言ではない。そして、そこから高齢者との接点を見出すことが難しいだろう。

#### 4. 先行研究

「高齢者と子ども」に焦点が当てられた研究には、まず、小学生に行った大人の仕事の認識と生活意識について質問紙調査を用いたものがある（田代ら1995）。ここでは、多くの子どもが、大人の仕事を家族や生活のためと理解しており、子どもたちが学習することと、大人の仕事の共通点として、「協力」という局面をあげている。また、高齢者のイメージについて研究されたものでは、中野が行ったSD法による調査がある。これは、小学校3～6年生に対して、18項目の形容語をもとに調査した。主成分分析を用いてイメージの構造分析を行ったこの調査では、子どもは高齢者に対して肯定的なイメージを抱いているという結論に達している（中野1991）。また、高齢者との過去の経験の頻度がイメージの肯定・否定的に関係しており、特に、経験が多い方が肯定的なイメージを持つのに対し、少ない方が否定的なイメージを抱いていると報告がされている（中野ら1994）。このイメージと関連して大変興味深いのが、保育園児の「ごっこ遊び」の観察の中で高齢者役が大変人気がないことが明らかになった報告である（岡野1996）。保育園の遊びの中で高齢者の役は人気がいだけでなく「〇〇じいさん」という呼び方が、相手を非難したり侮辱する時にしばしば用いられているという。

また、小学期の子供たちは高齢者に対して肯定的なイメージを持つ方が多く、そのイメージは成長していくにつれて、否定的なイメージへと変化していくことを明らかにした。岡野の別の研究では、小学期の肯定的なイメージは、高齢者との体験からのイメージではなく、観念的だという。そして、高齢者に対しては、長寿で社会経験を積んできたことを「すごい」と感じていたり、「参考にしたい」と思っているものの、関心や理解の程度は低く、憧れの対象というわけでもない（岡野1997）。

このように保育園児から中学生くらいまでの子どもたちがもつ高齢者のイメージについて、わが国では研究が行われているが、子どもたちの自由な発言から分析したものではなく、調査者側の蓄積されたデータからあらかじめ設定された形容語に対する印象の強度を尋ねたものである。しかし、本研究は子どもたちのイメージしている生の声、使っている表現から高齢者のイメージを探ろうという試みである点において、いままでに行われてきた研究方法とは異なる。

## 5. A市の学童に通う子どもを事例として

### (1) 対象と方法

本調査は、A市の学童保育Bを利用している子ども（1～6年生）に対して、2005年8月22～26日にかけて各日4人の調査員が半構造化面接を行った。調査は学童保育Bで行い、調査時間は事前に指導員と打ち合わせの上、学童保育の日課（学習など）に差しさわりのない、10:00～11:30、13:00～15:00とした。子どもたちへの調査協力依頼の形式は、各調査日の朝に協力してほしいこと、どんなことを聴きたいのかなどについて、全員に向けて説明した。また、保護者への説明と同意は、6月に行われた学童保育Bの保護者会で書面にて、趣旨、調査データの利用についてなどを説明した上で同意を得た。

調査内容は、「一日の生活時間調査」「生活圏について」「自分の祖父母について」「大人・お年寄ってどんな人」の4項目である。なお、「一日の生活時間調査」は22日、23日に行い、それぞれ前日の1日の過ごし方について調査した。この日を設定した理由は、①夏休みであり、比較的家族間およびその他の交流があると考えられること、②共働き家庭の子どもたちが、夏休みも学童保育で過ごしていることから、夕方の人間関係についての広がりがあるか否かを見るため、③休日、平日の過ごし方と人との関わりの比較をするためである。

### (2) 対象調査地域

調査対象となった学童保育BのあるA市は、人口約14万人であり、近年では名古屋のベッドタウンとして都市から移り住む人が増えている。学校基本調査によれば、A市には28校の小学校があり、生徒数は、2004年4月現在で8,555人の児童である。学童保育は現在9カ所あり、そのうちの1つが学童保育Bである。学童保育Bがある地域は、1971年に国有林を中心とした大規模な住宅開発が行われ、分譲住宅が1970年代後半ごろから建てられ、それに伴い小学校がこの地区に開校している。学童保育Bは小学校併設型ではなく、開発された団地の住宅外にあり、近隣3つの小学校の子どもが利用している。

A市が行った「次世代育成支援に関するニーズ調査報告書」では、A市の小学生がいる家庭の保護者の就業は次のようであった。父親がフルタイムで働いているのが91%、母親のフルタイム就業が16.9%、パートが47.5%であり、非就業は30.3%である。また、家族構成としては、2世代家族が65.9%、3世代家族が26.0%であり、半数以上の小学生のいる家庭が核家族であることが明らかとなっている。また、2世代家族の人数についても報告書では触れている。それによれば、2世代家族で3人が17.3%、4人が59.0%、5人が21.3%であり、両親と子ども2人という家庭が半数であることがわかる。このような家庭環境で育てている子どもは、放課後どのように過ごしているのか。同報告書によれば、平日の16-18時に保護者と祖父母と過ごしているのが29.3%、学童3.5%、友達と公園14.4%、学習塾7.4%となっている。しかし、母親の職業別放課後の過ごし方という観点から見ると、フルタイムで働いている母親の子どもは、同時間21.1%が学童で過ごし、子どもだけが家にいる5.3%、1人3.0%、友人の家10.5%、塾18.8%となっている。

### (3) 分析方法

「一日の生活時間調査」は、起床から就寝までの間で「誰と」「どこへ」「何をしに行って」「どんな人と会ったか」についてヒアリングし、子どもたちのヒアリングから人物の続柄を抽出し、時間と続柄という2つの軸により分析を行った。

「自分の祖父母について」は、子どもたちにそれぞれ自由に語ってもらったことを記録したもののカテゴリーを抽出し、学年ごとに分析した。「大人・お年寄り」のイメージについては、子ども

の言葉を「プラス・マイナス・外見」の3つのカテゴリーに分け、さらに学年ごとの差違を分析した。

1) 調査1—子どもと接点を持つ人

学童保育に行く日と行かなかった日に、子どもたちがどのような人と接点を持ちながら生活をしてきたのかを分析した結果が表1である。子どもたちの生活のなかに登場してきた人物は、父、母、兄、姉、弟、妹、祖母、祖父、友人、いとこ、その他であった。その他に含まれたのは、父の友人である。学童に行く日は、いとこの接触は見られず、学童に行かない日、すなわち夏休みの休日にはいとこ接触している。父母とのかかわりに注目してみると、学童へ行く日には8:00、17:00

表1 子どもが誰と接点を持っているのか

	学童に行く日										学童に行かない日												
	父	母	兄	姉	弟	妹	祖母	祖父	友人	いとこ	その他	父	母	兄	姉	弟	妹	祖母	祖父	友人	いとこ	その他	
8:00																							
9:00																							
10:00																							
11:00																							
12:00																							
13:00																							
14:00																							
15:00																							
16:00																							
17:00																							
18:00																							
19:00																							
20:00																							
21:00																							
22:00																							
23:00																							
0:00																							

以降に集中している。これは、兄弟においても同じである。一方、学童に行かない日は父母や兄弟とは一日を通して接触していた。祖父母に注目してみると、学童に行く日には、ほとんど接触が見られない。8:00に接触している人場合は、祖父母と同居している、また夕方の一時的接触は、子どもたちの迎えを両親に代わってしているケースである。

このように、家族構成員である父母、兄弟姉妹で生活が成り立っており、休日であっても祖父母、友人との交流が見られるものの、その他に属する人は見られなかった。

2) 調査2—祖父母について

子どもたちの発言を学年別に示したものが、表2である。子どもたちは、祖父について、「元気」、「好き」、「遊びに連れて行ってくれる」、「仕事をしている」といったイメージをあげており、祖母には、「元気」、「怒らない」、「仕事をしている」、「料理が得意」といったイメージをあげていた。具体的にどんなことをしていて、何が得意であるのか、自分にどんなことをもたらしてくれるのかということについて具体的に述べられていることが特徴的であった。また、子どもにとって祖父母は「〇〇してくれる」存在であることも明らかになった。特徴的であったのは、「嫌い」をはじめとするマイナスの感情やイメージが少ないことである。

3) 調査3—大人・お年寄のイメージ

子どもたちが大人をイメージするときは、まず自分の父母をあげている。次いで、「大きい」「背が高い」といった外見的特徴をあげている。さらに、行為として「車に乗れる」ということを低学年から高学年の子どもたちのイメージとして明らかとなった。また、小学校低学年の場合は、大人のイメージを外見から捕らえている傾向がみられ、高学年になると外見では判断できない、「自分たちより知っていることがある」「いろんなことを教えてくれる」といったことや、「自分勝手」「よく怒る」などといったマイナスイメージ的側面からの見方があげられていた。

一方で、高齢者のイメージは、低学年から高学年までを通して、「小さい人」「杖をついている」等があげられている。また、低学年では、「おじいちゃん、おばあちゃん」という発言がみられた。

全体的に外見的特長があげられている。また、低学年の子どもからは「元気でない」「死んでいく人」「弱そう」といったマイナス的なイメージが聞かれる一方で、高学年の場合は、「子どもに対して優しい人」「昔のことを良く知っている」といった高齢であることのプラス面を捉えていた。

表2 自分の祖父母について

祖父	1年	2年	3年	4年	5年	6年
元気						
あまり怒らない						
やさしい						
好き						
力持ち						
カッコいい						
尊敬する						
魚料理が得意						
面白い						
やさしい						
いつもニコニコしている						
何でも買ってくれる						
家に行くと「よく来たね～」といってくれる						
遊びに連れて行ってくれる						
あまり物を買ってこない						
お菓子を送ってくれる						
よく遊んでくれる						
野菜を届けてくれる						
学童の迎えに来てくれる						
月1回来てくれる						
タバコをすう						
いつも酒を呑んで酔っている						
耳が遠い						
あまり外に行かない						
ほとんど家の中にいて、寝てばかり						
草取りをしている						
髪がうすい						
ひげが長い						
背が高い						
髪が白い						
髪が黒い						
いつも病院に行っている						
仕事をしている						
植物を集めている						
時々散歩する						
近所の人とよく会話をしている						
畑を持っている						
囲碁や五目並べは強い						
ダンプに乗っている						
そんなに好きではない						
怒ると怖い						
眼鏡をかけてるのが似合っていない						
元気ではない						
おじいちゃんにはなりたくない						

祖母	1年	2年	3年	4年	5年	6年
元気						
怒らない						
やさしい						
好き						
ニコニコしている						
話しやすい						
老眼鏡をかけている						
髪が長くて白い						
髪をおだんごにしている						
おじいちゃんの病院の送迎をしている						
仕事をしている						
野菜作りが得意						
料理が得意						
家事をしている						
低カロリーのご飯を作っている						
足が悪くて家がバリアフリー						
すごい人						
ご飯を持ってきてくれる						
いろんなものを買ってくれる						
遊んだりはしない						
怒ると怖い						
話はしない。母と話すのを見てる						
母と仲良くないから好きではない						
自分とは相性が悪い						

表3 大人・お年寄ってどんな人

大人		1年	2年	3年	4年	5年	6年
	おとうさん・おかあさん						
	大きい						
	背が高い						
	お酒を飲む						
	先生くらいの人						
	車に乗れる						
	眼鏡をかけている						
	買い物に行く人						
	若い人						
	怪しい人						
	泣かない人						
外見	ピアスをしている人						
	白髪がある人						
	化粧をしている人						
	胸がある人						
	年をとっている人						
	1人で暮らしている人						
	サラリーマンっぽい人						
	土日になるとゴロゴロしている						
	早い。急いでいる						
	仕事に行く						
	男性だったらひげがある						
	しわがある						
	やさしい						
	賢い人						
	足が早い人						
プラス	いい人						
	好きな場所に連れて行ってくれる人						
	力が強い人						
	いろんなことを教えてくれる						
	自分たちより知っていることがある						
	ほとんどの人が規則正しい						
	強い(パワーがある)						
マイナス	頭が固い						
	自分勝手						
	よく怒る(怒ると怖い)						
	最初に必ず注意事を言う						
	大人が怒る方						
	大人は嫌だ						
	大人になりたくない						

  

お年寄り		1年	2年	3年	4年	5年	6年
	おばあちゃん・おじいちゃん						
	しわがある						
	ちょっと怖い						
	年とってる人						
	小さい人						
	散歩をいっぱいする						
	ゲームをしない						
	腰が曲がっている						
	入れ歯						
	ひげが生えている						
	白髪						
	背が低い						
外見	杖をついている						
	声がなまっている						
	目が見えない						
	着ているもの和風						
	歯が抜けている						
	耳が遠い						
	のんびりしている						
	動きがゆっくりしている						
	怒っても大人ほど恐くない						
	車椅子に乗っている人が多い						
	髪の毛が少ない						
	背中が丸くなっている						
	怒るときが少ない						
	優しい人						
	好き						
プラス	元気						
	子どものことを考える人(ものを買ってくれる)						
	子どもに対して優しい人						
	昔のことを良く知っている						
	料理を豪華なものから勧めてくれる						
	帰るとき必ず何かくれる						
マイナス	元気でない						
	死んでいく人						
	スポーツをあまりしない						
	弱そう(よぼよぼ)						
	絶対なりたくない						

6. 考察

本研究では、両親が共働きであるために学童保育へ通っている子どもを対象に調査を行った。これは、わが国における今日の子育ての環境を考えると決して特異ではなく、あくまでも一般的な生活環境でくらす子どもたちといえるだろう。このなかで、今回は、比較的子どもが様々な人と出会う機会が多いとされる夏休みを調査期間に設定したが、本調査では、両親、兄弟姉妹以外の人とは平日にはほとんど接触していないことが明らかとなった。また、休日であっても、友人や祖父母が加わるのみでその他の人に接触していなかった。習い事や買い物へのアクセスも主に母親による自動車での送り迎えが多いことが同調査で明らかになっていることから考えても、家族や友人、習い



事で接触する教師以外の人と会う機会がなくなっている。A市のこの付近は、団地ということもあって、大型スーパーやコンビニエンスストアはあるものの、子どもが1人で買い物に行けるような場所も少ない。無論、祖父母との関わりの他は高齢者との接点は考えられない。このような環境で生育している子どもがもつ高齢者像は、祖父母とは全く違うものであった。高齢者と祖父母の最大の違いは、祖父母は「〇〇してくれる存在」であることである。故に、子どもたちは祖父母に肯定的なイメージを持っている。「カッコいい」「力持ち」「尊敬する」といった祖父のイメージは、憧れとも取れる。また、祖母のイメージには、「野菜作りが得意」「料理が得意」などといった祖母が得意としていることがあげられていた。

一方で、高齢者の主たるイメージは外見から作り上げられていた。そして、高齢者と自分の祖父母が一致している子どもたちは、「帰るときに必ず何かくれる」「料理を豪華なものから勧めてくれる」という発言をしていた。この結果は、高齢者をイメージできないのではなく、かかわりや接点頻度によって理解していくものだと考えれば極端にその頻度が少ないために理解につながらないのではないだろうか。自分たちの祖父母については、イメージではなく個々人の得意・不得意を語る子どもたちであったが、高齢者はイメージできていない。これは、接触の時間と頻度が影響しているものだと考える。つまり、高齢者との接点が乏しい、あるいは無い子どもたちにとって、それはテレビや空想の世界でしかない。しかしながら、接触の機会があれば、「〇〇できる人」「〇〇できない人」といった具体的な事柄に触れながら高齢者を理解していくのではないだろうか。さらにいえば、多くの高齢者と接触する中で、具体的な特徴に気づき、例えば、同じ年齢であっても体が弱い人や強い人、杖を使う人や車椅子を使う人、など様々であるという認識をすることができるのだと考えられる。

先行研究では、小学生が高齢者とイメージする年齢は、60～64歳であるという回答が約40%と報告されたものがある(中野ら1994)。本研究では、祖父母は「元気」という印象を持っているのに対して、高齢者を「よぼよぼ」「死んでいく人」と表現されているのがみられた。このことから、中野らの研究による高齢者は本研究でいうところの子どもたちの祖父母にあたりと考えられる。祖父母には、それぞれ役割を見いだしているが、高齢者には、役割があるかどうかとも認識していない状況である。

増山は、高齢者と子どもを取り巻く状況を次のように述べている。

今日、子どもや高齢者が抱えるさまざまな問題の背景には、「子ども」と「高齢者」がともに社会の中で正当な位置を占めていない、社会参加が保障されていないという問題がある。生産能力と生殖能力が未成熟・低下・喪失した「子ども」と「高齢者」は、現代社会においては保育や介護の対象として、ともに社会的に弱い存在・依存して生きる存在であり、手間とカネのかかる厄介な存在として見られている(増山2003)。

広井(2000)は、人間はそもそも三世代構造を持っているということから「人間の三世代モデル」を提唱した。人間には世代伝達のために「+α」が必要というものだが、高齢者は、「遊」+「教」であると述べている。一方で、子どもは「遊」+「学」であり、この高齢者の「教」と子どもの「学」が相互作用することができる。高齢者は子どもに教えていく、そして子どもは高齢者から教わる。この関係は、生産労働者である大人には担えない役目である。ともに弱い存在として社会から見られてきた両者が、実は大きな役割を持っている。

そのために、高齢者や子ども自身が介護や保育を受けるだけの対象だけではないという意識が芽生えるようなプログラム開発が必要となってくる。それは、高齢者のイメージが外見だけのものではなく、それぞれの人生が異なり、健康状態も違い、障害を負うこともあることを日常のかかわりから知ることである。外見だけでは判断しづらい障害も、定期的なかかわりがあれば知ることでも

きる。例えば、認知症の高齢者であっても、時間をかけて定期的にかかわることで、「物事を覚えていられない人」という認識ではなく、「最近のことは覚えていられないが、昔のことはよく覚えている人」とその人のプラス面を捉えることができるだろう。

## 7. 終わりに

近年、盛んに高齢者との交流活動に取り組んでいる施設や学校が出てきている。高齢者から学ぶこと、高齢になることを知ることより先に、まず、その接点をどのように作り出すかということが重要になってくる。単に、学校と施設の交流活動という名目のもと、高齢者と子どもを引き合わせるのでは意味がない。生活のなかに高齢者が居ない子どもたちにとって、イベント的な交流活動では高齢者理解につながらないと考えられるからだ。イベント的な交流がもたらす弊害として、見た目先行イメージができてしまうだろう。コミュニケーションが継続的にできる機会をプログラムすることで、「〇〇ができる人」「〇〇が得意な人」といった、個々人の質に目を向けることができるようになると考えられる。

子どもが高齢者をどのようにイメージではなく理解をしていくのか、高齢になること、そしてさまざまな病を患いながら生活していくことをどう捉えていくのか。その生活場面に関わりながら成長していくことが、子どもにとって必要だろう。このことが、冒頭に述べた「老い=宇宙人」というイメージをもたせない、またはそのイメージを変えていく手がかりになるのではないかと考える。

## 文献

- 谷川俊太郎. おばあちゃん. ぼるん舎. 1982.
- 門脇厚司. 子どもの社会力. 岩波新書. 1992.
- 尾木直樹. 子どもの危機をどうみるか. 岩波新書. 2005.
- 野田正彰. 漂白される子どもたち. 情報センター出版局. 1988.
- 仙田満. 子どもとあそび. 岩波新書. 1992.
- 田代勢津子, 田代裕一. 子どもの「大人のしごと」の認識と生活意識との関連  
—小学生への質問紙調査による—. 西南学院大学児童教育学論集22(1). 1-30. 1995.
- 中野いく子. 児童の老人イメージ—SD法による測定と要因分析—. 社会老年学34. 23-36. 1991.
- 中野いく子, 冷水豊, 中谷陽明, 馬場純子. 小学生と中学生の老人イメージ—SD法による測定と比較—. 社会老年学39. 11-22. 1994.
- 岡野雅子. 『ごっこ』遊びに現れた家族・家庭生活—保育所児と養護施設児の観察から—. 日本家政学会誌47(5). 435-333. 1996.
- 岡野雅子. 異世代に対する子どもの関心と理解—子どもにとっての高齢者の意味—. 日本家政学会誌48(1). 71-80. 1997.
- 増山均. <子ども・高齢者>問題と世代間交流の動向. 早稲田大学大学院文学研究科紀要49第1分冊. 81-94. 2003.
- 広井義典. 「老人と子ども」統合ケア—新しい高齢者ケアの姿を求めて. 中央法規出版. 2000.

## 付 記

本研究は、財団法人日本興亜福祉財団研究助成による平成17年度ジェロントロジー研究助成金の成果の一部である。本調査に協力くださった、学童保育の子どもたちおよび指導員の方々、調査員の各大学の学生方に感謝申し上げる。